

**書評 奥野克巳著『「精霊の仕業」と「人の仕業」
-- ボルネオ島カリス社会における災い解釈と対処
法』**

著者	大橋 亜由美
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジア経済
巻	46
号	2
ページ	98-101
発行年	2005-02
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00007617

奥野克巳著

『「精霊の仕業」と「人の仕業」』
——ボルネオ島カリス社会における
災い解釈と対処法——』

春風社 2004年 313ページ

おおはし あゆみ
大橋 亜由美

I

本書は、インドネシア・西カリマンタン州（ボルネオ島）のカリス（Karis）人の災因論をめぐる民族誌である。

ボルネオ島は、島の北部のおよそ3分の1がマレーシア領（サバ・サラワク州）とブルネイ王国で、残りの南部3分の2がインドネシア領となっている。ボルネオ島のインドネシア領はカリマンタンと呼ばれ、本書の舞台となる西カリマンタン州と、東・中部・南カリマンタン州の4州に行政上区分される。本書に登場するカリス人は、ボルネオ島の非イスラム住民に与えられた総称である民族集団ダヤク（Dayak）に分類される。インドネシアで最長とされるカブアス川の上流部に注ぎ込むマンダイ川の支流カリス川とその周辺の内陸部に住む人びとであり、人口は2000人弱で、焼畑稲作を主たる生業とする。

人は予期せぬ不幸や災厄に見舞われたとき「なぜ私が？」という疑問を抱く。人類学はその「なぜ」の原因を諸社会の宗教観や世界観に見つけ出そうと努め、重要な研究対象のひとつとしてきた。人びとが自分たちに起きた不幸な出来事をどのように説明し、どのように対応するのか、それを追究してきたのが災因論研究である。著者は2年間（1994年1月～95年12月）にわたる当地でのフィールドワークに基づき、カリス社会の災因論をめぐる本書の執筆にあたっている。著者は従来のダヤク諸社会における

広義の災因論に関する先行研究を踏まえ、本書のタイトルどおり、カリス社会における不幸な出来事を、精霊などの目に見える世界の背後に存在する超自然的な存在に「帰責」する「精霊の仕業」と、人間によって引き起こされる邪術と毒薬に帰責する「人の仕業」という2つの災因を中心に論を展開する。議論の中心は主に以下の2点である。

第1に、カリス社会における災厄の説明は多元的・非決定的であるという点である。災厄の説明は決して平面的で固定的な構造ではなく、内的・外的要因によっていかようにも適応的に変容しうるものである。そして主な災厄の原因である「精霊の仕業」と「人の仕業」は、それぞれその原因と対処法が異なるが、必ずしもこの2つは明瞭に区別されるわけではなく、人びとが状況に応じて「合った」説明／解釈を選んでいくのである。第2に、災厄を説明するための精霊や毒薬・邪術といった諸観念は、本来そこに「確固たる現実」としてあるのではなく、不幸な出来事を前に、「人びとが協働的な実践を通じて、徐々に、現実として仕上げられる」ものであるという点である。著者は、人びとがなぜ災厄が引き起こされたのか、その原因を追求する過程の語りを通して、諸観念は組織化され、リアリティを高めていくのであると主張する。

II

本書の構成は、以下のとおりである。

序 章

第1章 カリス社会について

第2章 神話・歴史と精霊世界

第3章 病気から死へ

第4章 カタベアアン

第5章 病気治しとしてのバリアン儀礼

第6章 災厄としての狂気

第7章 パルマコンとしての毒薬

第8章 邪術師を暴き出す

終 章

では、本書の内容を章ごとに要約していこう。

第1章では、本書の舞台となる調査地域について概観している。カリス社会では、親族のつながりが無い者同士に擬制的な親族関係を築く「擬制親族制度」が発達している。人びとは頻繁にこのような関係を築くことで、社会関係を円滑にしており、著者もその例外ではない。2年間の村での滞在中に、日常的に「おじ、息子、孫」などの呼称で呼ばれるようになったそうである。また、カリス社会がインドネシア国家において辺境に位置している点にも言及している。

これまで文字を持たなかったカリス社会では、神話や歴史は口頭で語り伝えられてきた。そのような口承文化の中で、見た夢の内容を他者に語りその解釈を求めるという行為が、カリスの人びとの信じる精霊世界をいかに構成していくかが第2章で描かれている。カリスの人びとは、なかなか「われわれの祖先の話」(=神話や歴史)について語ろうとしない。なぜなら、神話や歴史を語ること自体がそこに登場する神格や精霊を扱うことであり、適切に扱わない場合は、病気やけがや死といった災いをもたらす可能性があると考えられているからである。本章では、著者の語った夢がカリスの人びとによって神話や歴史に登場する人物と結びつけられ、著者自身がそのような神格や精霊に対して捧げものをおこなうテオバン儀礼の主催者になる(させられる)過程が考察されている。著者はこの過程を分析することで、神格や精霊が災厄を引き起こす行為主として構成されていく様子を明らかにしている。

第3章では、ある幼児が死に至る経緯を通して、カリス社会の災因の多元性と非決定的な状況を議論し、これまで一元的な災因論が繰り返される傾向にあった民族誌的記述に新しい可能性を提示する。幼児の瀕死の状態を目の前にして、病気治しの儀礼の専門家バリアン2名はともに災因を「精霊の仕業」としながらもそれぞれ異なる対応をとる。家族もバリアンにまかせきりではなく子どもを救うと考えられる様々な行為をとる。これらの人びとの行為は決して幼児の病因・死因をひとつに限定するのではなく、多元的・非決定的に構成される「開かれた災因」が存在することを示している。

第4章では、他人から提供された食べ物や飲み物をとらないことに関係し、カリスの災いを説明する「カタベアアン」という語をめぐって考察されている。カリス社会では他人から提供された食べ物や飲み物を断ったり、断ったことに対して適切な処置を怠るとカタベアアンになり、その結果病気や死、蛇やムカデなどの小動物に襲われるなどの災いに見舞われるという説明が存在する。本章では、カタベアアンに関する複数の事例が検討され、カタベアアンという共有の知識が人びとと精霊世界を強く結びつけ、カタベアアンにならないための事前の予防的行為と、実際に災いが生じたときにその原因をカタベアアンに遡及する推論との循環を反復することが、その背後にある精霊と精霊世界の「実存性を持続させている」と分析する。

第5章では、「シャーマニズムに治療効果があるのか」という問いを続けてきた従来のシャーマニズム研究に著者は一石を投じる。シャーマニズム研究そのものに科学的医学の治療、治療効果という概念があらかじめ含意されていると指摘する。本章では、病気やけがなどの災厄の原因が「精霊の仕業」と考えられた場合にバリアンと呼ばれる専門家によっておこなわれる治療儀礼を通して、カリス社会のシャーマニズムについて洞察する。著者は、シャーマニズムはその「手続きが病者によって経験される症状を別次元のできごとに置き換え、そのできごとを処理することなのだ」とすると、それは、医師が病者個人の身体および身体器官に生じた症状に直接的に働きかける科学的医学の病気治療の手続きとは似て非なるものということになる(140ページ)と論じる。

第6章では、災厄のひとつとされる狂気について分析している。カリス語ではラオラオ(rao-rao)とマウノ(mauno)と呼ばれる2つの狂気があるが、カリス人はマレー語やインドネシア語で狂気を表すギラ(gila)と同様だと説明する。しかし、実際にはカリスの人びとが明らかにその2つを区別して使用していることに著者は注目する。そこでラオラオとマウノとされる複数の事例を取り上げ、それぞれどのような行動・行為が狂気とみなされ、両者の区別がどこでされているのかを丁寧に追っている。ラオ

ラオは、悪戯や落ち着きのない子どもに対しても用いられる表現であり、病気とはされないが、病気の際と同様の対応がなされ、その原因は精霊に帰責される。バリ안의巫病もラオラオと考えられる。一方、マウノは治らないとみなされ対処もされない。ラオラオと異なり、マウノはカリス社会の規範から逸脱した行為とみなされ、その原因は行為者自身に求められる。また行為者が自らの行為を改めようとしないこともマウノの特徴である。

第7章では、「人の仕業」としてカリス社会の毒薬について論じられる。カリスは近隣地域において「毒薬使い」で名高い。まずいくつかのカリスの毒薬について紹介している。実際にはこのような毒薬は、カリス社会の外部から主に出稼ぎ帰りの人によって持ち込まれたものである。毒薬によって引き起こされた災いや病いへの対処（治療）には原因となった毒薬を使用する。つまりカリスの毒薬はその毒薬に抗する対抗薬でもあるという両義的な存在である。著者はこの毒薬／対抗薬を持っている数名にインタビューをおこない、その所有者に関する社会的評価の両義性についても言及する。

第8章では、ある邪術告発裁判を通して、インドネシア国家における現在のカリス社会の位置について論じている。邪術は「人の仕業」とされる災因だが、これも毒薬と同様外部（マレー・ムスリム）から近年もたらされたものだと考えられている。あるカリス人男性がカリス人とマレー人の2人の男性に脅され、集落長に邪術をかける手伝いをさせられたと告発する。邪術の標的となった集落長は家族や周囲そして自らもラオラオと認めるようになった。刀等を振り回すなど暴力的な行為を頻繁におこない、邪術の手伝いをさせられたと主張する男性はいつか自分が殺されるのではないかと怯え、村長にこの事件を告発するに至るのがこの邪術告発裁判の始まりである。インドネシアでは、通常邪術によるもめごととはアダット（口承による慣習体系）によって対処されているが、本事例はその後、郡の警察署長や出先行政機関の行政官を巻き込んでいく。著者は一連の出来事の成り行きを通して、近代＝中心（インドネシア近代）と周辺（カリス社会）の図式を読み解

く。警察署長と行政官等によって構成された「郡指導協議会」は、本事例の解決を基本的にはカリス社会のアダット会議に差し戻し、その結果神明裁判（カリスの場合、熱湯に手を入れて火傷をするかどうかで真偽をはかる）が開かれ、郡指導協議会はオブザーバーとして裁判の行方を見守ることとなった。一方カリス人は「インドネシア官僚主義」を見習い、神明裁判に際して慣れない文書を作成した結果、不具合なものができてしまう。アダットを尊重し「文化的な差異」を認める郡指導協議会の措置とそれに対するカリス人の反応は、カリス人がインドネシア国家の「辺境の民」として位置づけられていることを強化していると議論する。

III

本書において、著者は民族誌を記述するうえで常につきまとう問題にあえて挑戦している。ある世界を描写する民族誌は、書くという行為の中で調査者によってある程度の体系的な記述の様相を呈することになるが、実はそのような一見体裁の良い記述には、掘いきれない様々な断片的な情報や経験があることも事実である。著者はこのような「体系的な記述」と「それには回収できない要素」を同時に民族誌の中で記述していくことを試みる。しばしば人類学者は、人が身の上起きた不幸な出来事を説明するとき、あたかも体系的な災因論に基づいて思考し対処しているかのような印象を与える記述をする。しかし、著者は実際には不幸の原因は将来にわたって複数に遡及される可能性があるとし唆する。著者は、このような体系的な記述からこぼれおちていく経験や情報、現実の出来事とのずれ、あるいは綻びにこだわることにより、新たな民族誌の可能性を見出そうとする。ひとつの不幸な出来事についての複数者の語りを紹介し、また、時系列的に出来事の過程を描写し、それとともに変化する語り手の語りを「並列」して記述することで、著者のこの試みは効果的に機能していると思われる。本書は、人類学者のフィールドにおける日常の経験そのものが調査活動を構成していく様子や、人類学者が現地の人間関係を

の渦に巻き込まれていながら思考していく過程が行間を通して伝わる秀逸な民族誌である。

以上のような著者流の民族誌記述の努力を十分に評価したうえで、次の点を指摘しておきたい。まず、カリス社会が位置する地域社会の動態が見えにくい点である。出稼ぎ（マナモエ）という経済活動には言及されているが、カリスの人びとが周辺地域とどのような関係性を構築しているのかが分かりにくく、それは次のような疑問につながる。

まず、カリス社会の災因論におけるキリスト教の影響がどの程度あるのかが不明な点である。第1章において、カリス社会では名目上人びとの99%以上がインドネシアの宗教カテゴリーであるカトリック教徒であると言及されている。記述のスタイルから鑑みれば、著者の周囲にキリスト教の影響を窺えるような人物や出来事（夢見を含めて）がなかったのかもしれないと察するが、不幸な出来事の説明にキリスト教の影響が全く見られないと考えるのも些か不自然に思われる。次に「人の仕業」として登場する毒薬と邪術について、毒薬は出稼ぎから里帰りした男性たちによって、そして邪術はマレー・ムスリムの知識として、どちらもカリス社会の外部から持

ち込まれた新しい災因論のイデオロムであると著者は推論している。しかしながら、カリス社会を取り巻くボルネオ島の地域社会における通時的・共時的な民族間関係の状況が見えにくいため、単に過去のある時点で外部から持ち込まれたものという推論には疑問が残る。それがカリス人にとっての外部の表象の問題と深く関わっているのではないかと考えられるからである。最後にカリス社会の災因論がこれまで永続してきたのは、現代社会（近代国家インドネシアの文脈）の影響（力）がまだ及んでおらず、それは極めて自己完結的であるからだと著者は論じる。しかし、カリスの人びとの暮らしが辺境の地であっても、全く周辺地域との関係がなかったわけではないであろう。現に、本書には出稼ぎ（マナモエ）やキリスト教の布教についても言及されている。そうであれば、カリス社会の災因論が永続するのは、その構造が柔軟にできていて、様々な外部の影響を吸収し消化して、自らの文脈において説明することができるからなのではないか、とは考えられないだろうか。

（京都文教大学人間学研究所客員研究員）